

第8話<神秘の森>の要約と参考資料

第8話の要約

祖母・傾・大崩山系にはツキノワグマが生息していました。1941年の捕獲を最後に「九州のクマ絶滅」といわれ、1987年に大分側の山中で射殺されたクマも、本州から持ち込まれたと結論づけられました。ところが2009年に、土呂久にクマの目撃者が現われたのです。

第8話の参考資料

8-1 祖母・大崩山群のクマの捕獲

加藤数功「祖母・大崩山群に於ける熊の過去帳とかもしか」（加藤数功・立石敏雄編著「祖母・大崩山群」所収）

以上の表で見るように約50頭が近世に於て、祖母・大崩山群の区域内で獲られたことが明瞭になっている。（P99）

私の表では昭和16年井川米一の獲ったものが最新のもので、それ以後17年間経過しても、1匹も獲れないから、現在生存していないといわれるかもしれない。（P102）

祖母・傾の地域で、熊に対する禁忌は非常なもので、熊を獲ると七代崇るといわれている。普通、猪、鹿、狼などは千匹獲ると千匹塚、またはシシの塔なるものを建立し供養するが、熊は一匹で熊塚を建てるのが通例とされている。（P100）

8-2 岩戸地区上村集落に保存されているクマの手足

加藤数功「祖母・大崩山群に於ける熊の過去帳とかもしか」のP97の表より

時期：明治14年、捕獲者：藤野四郎太先祖、獲り方：銃殺、捕獲場所：障子岳、備考：障子岳頂上に熊社あり。手足を保存

8-3 土呂久のクマの捕獲

富高コユキの話（1982年1月19日、電話で聴取）

私の父の鶴平の兄が佐藤千代太で、この人は「猟をするなら佐藤の家におかん」と言われ、弟の鶴平が家（屋号は「新屋」）を継ぎ、2~3間離れたところに隠居のようにして住んでいた。千代太は私がものごころついたころ（大正初め）死んだが、生前は猟師で熊を撃ったことがあるという話だった。

私の家には「熊の手」があって、「泣くと熊の手をやるぞ」というて、真っ黒い毛の生えた動物の手を（本当に熊の手やったろうと思う）をつきつけられた。

佐藤三代士さんの話（1983年1月28日聴取）

住義の先祖が熊と取っ組み合いした話が残っています。熊が来たので、鉄砲をさしたところ、熊が鉄砲を折ってしもたので、熊と取っ組みおうて、タキから落ちたという話です。トネさんには、熊の手がぶらさがっておったが、これは、住義さんの先祖の話とは別です。熊の胆、腹の痛みにたいへんよく効く薬をとったもんんじゃないかな。値段もいいものでしょう。薬として名薬だったんでしょ。肉は食べはされよったですかね。

佐藤トネさんの話（1982年2月18日聴取）

（実物は：右手の手首から先で、長さは20センチくらい。人間の腕よりやや太い感じ。肉も骨も爪もなく、なめした皮＝なめしてないと虫がつくはず、とのこと＝に黒い毛が茂っている）

一八さん（「新屋」。定夫さんの父）とこの人と、うちのご先祖さんとで一緒に獲った熊らしい。私の腕より太いわー。いつも壁に掛けてあった。

熊は安産らしいって。死んだおつうばあさんが「お産の時に、これで妊婦のお腹をさすったら、楽に赤ちゃんが生まれる」ち言いよった。わたしや、気持ちが悪いです。チトセさんはやられたっちゃないじゃろか。だいたい、あん人は安産だったけの。

私とこは、だいたい百姓で、猟期に願うて鉄砲持って山に行きよったらしい。今の猟期は11月15日から2月15日じゃが、前は半年ぐらいありよったじゃろ。

8-4 祖母・傾山系のクマに関する新聞記事

ツキノワグマ まだ九州にいた 大分県緒方町 祖母山系で捕獲（朝日新聞1987年11月26日）

九州では絶滅しているとされていたクマが大分県大野郡緒方町の祖母・傾山系の山中で地元のハンターに射止められ、25日、現地入りした九州大理学部の土肥昭夫助手（生態学）がツキノワグマと確認した。同県の資料では、九州でのクマの捕獲は昭和16年に同山系の宮崎県側であったのが最終となっており、同県教委は本格的な生息調査に乗り出した。

環境庁の鳥獣関係統計によると、九州で最後にツキノワグマが捕獲されたのは50年度に熊本県内で3頭となっているが、これは狩猟者の知事に対する自己申告に基づいたもので、公式確認はされていない。

捕獲されたツキノワグマは、体長136センチ、体重約100キロのオス。全身が黒い毛で覆われ、胸の部分に幅8センチ、長さ13センチの白い三日月の斑点がある。歯がかなり消耗しており、10歳前後と推定される。24日午前11時ごろ、緒方町上畑の林業佐藤辰美さん（59）が自宅近くの笠松山（1,522メートル）の杉林で一人でイノシシ猟をして

いる最中、猟犬 3 匹に追われた獲物が 4, 5 メートル前のやぶから飛び出したので散弾銃でシシ玉 1 発を発射した。「黒っぽいイノシシ」と思った獲物ははねるように逃走し、約 200 メートル離れたところにうつ伏せに倒れ、クマと分かったという。

クマの生存説は従来から地元には流れており、目撃談もあった。同県竹田営林署の藤島純高さん(57)は「作業中の営林署員がクマの足跡らしいものを見つけたこともあり、どこかにいると思っていた」と興奮気味。

現地入りした土肥助手は「クマの九州生存を裏付ける貴重な資料だ。解剖して胃の中身を調べてみないと分からないが、木の実や川の魚を食べていたのだろう」といい、九州大理学部の小野勇一教授は「ほかに何頭いるかは調査してみないと分からないが、常識的には 1 頭だけ生息していたとは考えづらい」と話している。

射殺ツキノワグマは「野生」—九大など調査報告— 4 歳、他地域から移入も (西日本新聞 1988 年 4 月 17 日)

[大分] 大分県大野郡緒方町、祖母・傾山系の笠松山中腹で昨年 11 月、地元ハンターに射殺されたツキノワグマを調べていた九州大学理学部を中心とする学者グループは 16 日までに「ツキノワグマは年齢 4 歳、野生」などを内容とする緊急調査報告をまとめ、大分県に提出した。だが、犬歯が異常に摩耗していることなどから「鉄製のオリに入れられ、九州以外の生息地から連れてこられた可能性もある」と指摘、九州に野生のツキノワグマが現在も生息しているかどうかはなおはっきりしないとしており、九州絶滅説を覆す決め手は得られなかった。

報告書によると①胃の内容物はカシ類の実(ドングリなど)が大部分を占め、飼料など人工的食品や栽培植物は検出されなかった②直腸内のフンの分析では、人工飼育に見られる耐性大腸菌は検出されなかった—などと明記。耐性大腸菌は一度保有すると 4, 5 年は消失しない性質があり、4 歳という年齢から判断すれば生まれた時から野生だったと判断している。

一方、高齢のクマにも見られないほど犬歯が異常に摩耗している点は「鉄製のオリなどで捕獲されたクマに見られる現象」と指摘。九州以外の生息地で捕獲されたあと、何らかの理由で連れてこられた可能性も残るとしている。鑑定を中心となった土肥昭夫・九州大理学部助手は「九州でずっと生息していたかどうかの判断には、今後さらに探索調査が必要」と述べ、同山系に入山するハンターらに情報の提供を呼び掛けている。

高千穂にツキノワグマ? 一時捕獲、逃げられる (宮崎日日新聞 2009 年 5 月)

高千穂町岩戸の土呂久集落で今年 1 月と 4 月の 2 回、地元住民がクマらしい黒い動物を目撃していたことが 12 日、分かった。このうち 1 月は、一時捕獲したものの逃げられていた。本県で絶滅したとされるツキノワグマの可能性もあり、同所に住み、クマを探している日本クマネットワーク会員の写真家栗原智昭さん(43)は「断言はできない

が、可能性は十分ある」としている。

最初の目撃は1月15日。農業佐藤春喜さん（81）が、近くの山に仕掛けたイノシシ用箱わなで、イノシシではない黒い動物を発見した。春喜さんは箱わなの所有者で猟師の佐藤幸利さん（66）に知らせ、一緒に見てみると、体重30～40キロほどの動物が背中を丸くしてうずくまるように座り、ゆっくりした動作でじろりところら側を見たという。

2人は他の猟師にも知らせようと、箱わなから離れた10～30分のすきに、この動物は姿を消していた。自力で脱出したとみられる。春喜さんは「最初はアナグマかと思った。それにしても大きく、毛が真っ黒でつやつや光っていた。顔の辺りに白いものがあつた」と振り返る。

2件目は4月20日。1月の目撃現場から東に約800メートル離れた林道上で標高800メートルの地点。農業佐藤洋さん（66）が、山のがけを黒い大きな動物が駆け下り、道路を横断後、土手を越え林に消えていったのを目撃した。

栗原さんは「もしクマだとしてもツキノワグマとは限らない。外来種かもしれない」と指摘、情報提供も呼び掛けている。